

ドレスデンに滞在して

久保 勝規 量子物性理論研究グループ
Katsunori Kubo Research Group for Condensed Matter Theory

2008年4月から2年間、ドイツ・ドレスデンにあるマックスプランク固体化学物理研究所 (Max Planck Institut für Chemische Physik fester Stoffe, CPfS) に客員研究員として滞在し、軌道自由度のある系の磁性や超伝導の理論研究を行ってきました。これは日本学術振興会の海外特別研究員制度による派遣です。

ドレスデンはドイツの東、ポーランド・チェコの国境近くの街で、CPfSはその中心からトラムで数分の静かな住宅地にあります。この研究所の近くには他の研究所や工科大学もあり、多くの研究者が訪れます。そのため、いろいろな人のセミナーを気軽に聞きに行ける恵まれた場所です。計算機や整った居室などの研究環境、静かな居住環境ともに申し分ありませんでしたが、そこはドイツ、食べ物には苦労しました。それでも、限られた食材から日本風のものを作る技能を身につけ、デパ地下でイタリア産の大根を見つけたときには一人ニヤついたものでした。このような今後生かす機会のない技能と今後に繋がるはずの研究経験を持って、今年の春に帰国しました。

今回の滞在は、ホストの Thalmeier 氏を始めとする多くの方々のご協力によって無事に過ごすことが出来ました。心よりお礼申し上げます。



研究室にて

フランス原子力庁での1年

松田 達磨 アクチノイド物質開発研究グループ
Tatsuma Matsuda Research Group for Actinide Material Science

ウラン・超ウラン化合物の基礎研究に関する協力研究に基づく海外派遣により、2009年4月から1年間グルノーブルにあるフランス原子力庁 (CEA) にて、磁性及び超伝導に関する研究活動を行ってきました。グルノーブルは、リヨンから約100km 東南にある小さい都市ですが、CEAを始め CNRS (フランス国立科学研究センター)、ILL (ラウエ・ランジェバン研究所)、ESRF (ヨーロッパ放射光施設) 等の基礎物理学の大規模な研究施設や複数の大学があります。そのため、世界中から多くの研究者や学生が集まっています。私の所属した研究室も学生を含めて多国籍で、フランス人、ドイツ人、イギリス人、スペイン人、スイス人、ロシア人、日本人という具合でした。セミナーや普段のディスカッションでは、大抵英語が仏語が公用語でしたが、興奮すると咄嗟に母国語で応戦するという、白熱した議論の場面も多々ありました。このようなサイトにおいて、研究活動は元より、多くの研究者から刺激を受け、さらにそれ以外にも多くの友人が増えた事は私にとって大きな収穫であったと思います。生活面では、食材の入手等色々問題にも直面しましたが、それも良い経験となり、家族共々健康で楽しく過ごすことができました。最後に、この派遣に際して多くの関係者の皆様にご多大のお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。



CEA のフットボール大会にて
息子と撮影